



北方民族博物館だより

No.137



H2.141 彫刻付ソープベリー用木製さじ 北西海岸先住民／トリンギット
31.0×5.0cm 20世紀初期製作

ソープベリーは、多湿な沿岸森林部を除くカナダ・ブリティッシュコロンビア州全域に自生する、オレンジがかった赤色・半透明の、酸味と苦味のある実をつける、高さ1～4m程の木である。自生域に暮らす北西海岸先住民は、夏に枝の下にマットや桶を置き、棒で枝を叩いて実を収穫し、実に水を加えて泡立て、甘味を付けて嗜好品として食してきた。泡は卵白をかき混ぜた時のようで、サーモンの身に近い色をしている。かつては甘いベリーなどが甘味を付ける際に用いられていたが、現在では砂糖が使用されている。ソープベリーを食べるには専用の皿と木製スプーンが使われてきた。写真はそのソープベリー専用スプーンである。

目次 Contents

- 1 表紙 彫刻付ソープベリー用木製さじ
- 2 館長講座「オホーツク海沿岸諸民族の交流 ―コリヤークとニブフを中心に―」
コンサート「モンゴル＆カザフ遊牧音楽の宴」
- 3 ロビー展「ソ連・ロシアと東欧のマッチラベル展」
ロビー展解説会
- 4 INFORMATIONN



館長講座

オホーツク海沿岸諸民族の交流
—コリヤークとのニブフを中心に—

2025.4.12(土) 10:00-11:30

講師：呉人 恵（当館館長）

水産資源が豊富なオホーツク海では、古くより様々な民族が交易などを通して交流してきました。本講座では、6世紀から11世紀にかけてオホーツク海南岸一帯に展開したオホーツク文化と、オホーツク北岸一帯に展開した古コリヤーク文化を取り上げました。具体的には、オホーツク文化の担い手はニブフで、古コリヤーク文化と交流があったとする考古学者・菊池俊彦氏の見解を道しるべに、両文化の関係性、さらにはコリヤーク語とニブフ語の共通点と相違点を探りました。両文化の遺跡からは、よく似た刻文の土器や鉛^{もり}先をはじめとする骨角器などの出土品が発見されています。のみならず、中国の北宋年代の貨幣も発見されています。菊池氏は、両文化の出土品の類似性を、『通典』などの中国の古い歴史書の記述と照らし合わせることで、オホーツク文化の担い手はニブフであり、大陸の青銅製品や鉄製品などが、古コリヤーク文化の毛皮やセイウチの牙などと、ニブフを介して交換されたものと推測します。

本講座では、このような菊池氏の考古学的見解を紹介したうえで、コリヤーク語とニブフ語の関係を、語彙^{ごい}の借用関係、音韻・文法面での類似点と相違点、系統関係などの観点から探りました。両言語は古アジア諸語に分類され、相互に系統関係のない言語であるとされてきました。しかし、近年は、両言語には系統関係の可能性があると、通説に再考を迫る研究も出てきています。考古学的知見を踏まえるならば、コリヤーク語、ひいてはコリヤーク語が属するチュクチ・カムチャツカ語族とニブフ語の相互関係に関するより踏み込んだ研究が必要であると強調して、本講座を閉じました。網走に縁の深いオホーツク文化がテーマだったこともあり、参加者の皆さんには非常に熱心に聞いていただくことができました。（館長 呉人恵）



真剣に耳を傾ける参加者たち

コンサート

モンゴル&カザフ 遊牧音楽の宴

2025.4.19(土) 14:00-16:00

会場：講堂

出演：リヤス クグルシン氏（ドンブラ、歌）

ボコン ボルド氏（英雄叙事詩、馬頭琴他）

解説：西村幹也氏

（NPO法人北方アジア文化交流センターしゃが理事長）

モンゴルとカザフの伝統的な芸能文化に親しんでいたため、モンゴル国から来日した奏者を招き、民族音楽によるコンサートを実施しました。

西村氏による紹介に続き、最初にクグルシン氏により、ドンブラの演奏と歌が披露されました。クグルシン氏は、約30年にわたり、モンゴル国西部のバヤンウルギー県で遊牧民、医師として働く傍ら、演奏活動を続けてこられました。モンゴル国のカザフに伝わる古い楽曲を知る貴重な存在で、モンゴル国第一文化功労者勲章を授与されています。二弦の民族楽器ドンブラを巧みに弾きながら、張りのある声でカザフの歌を歌いあげてくださいました。

次に、ボルド氏が登場し、馬頭琴、トプショール、イケルなどの弦楽器や縦笛の演奏、喉歌、英雄叙事詩の語りなどをおこないました。ボルド氏も普段はバヤンウルギー県で遊牧生活を営みながら演奏活動をしておられますが、モンゴル国アカデミーが認定する9人の英雄叙事詩の語り部の1人です。英雄叙事詩は、28時間かかる長大なものもあるのですが、今回は短縮版をささやくような声で淀みなく詠唱してくださいました。

それぞれの演奏の前には、西村氏による曲の背景や歌詞の意味についての解説が入り、言葉はわからなくても曲のイメージや風景、心情が伝わってくるようでした。

本コンサートには、定員を超える36名の参加者があり、普段なかなか聞く機会がないモンゴル、カザフの音楽に熱心に耳を傾けておられました。（学芸グループ 中田篤）



トプショールを演奏するボルド氏

ロビー展

ソ連・ロシアと東欧のマッチラベル

2025.4.26(土)-5.18(日)

1855年に現在のかたちに近い安全マッチが発明されてから、今年で170年になります。19世紀半ば当時より、各国のメーカーはマッチの品質だけでなく、マッチ箱に貼付されるラベルのデザインにもこだはって生産を行っていました。マッチラベルとは単なる商品説明の紙ではなく、顧客を視覚的に引き付けるための広告の場であり、ときに政治的なスローガンが躍る広報の場でもあったのです。また、マッチラベルは時代や地域によって多種多様なデザインをもつため、日本を含め世界中にそのコレクターがいることで知られています。

本展では、造形作家のありよしきなこ氏が所蔵する旧ソ連圏で発行された大小のマッチラベルおよそ1万点のなかから、選りすぐりのものを47のジャンルに分け、展示を行いました。展示されたマッチラベルのなかには、単純に目で見て楽しいイラストや、色のコントラストが美しい多色刷りのデザインのほか、ラベル上のロシア語を解読することで初めて意外な意味がわかってくるものもありました。例えば、ユーモラスなウサギの絵が描かれているラベルをよく見てみると、実は「ウサギの肉はダイエットにおすすめ」と書いている、といった具合です。

そのほか、本展で紹介された旧ソ連圏に特徴的なマッチラベルとして、社会主義的な思想やシンボルを前面に打ち出したもの、コルホーズ（集団農場）や計画経済に関連したもの、宇宙・核開発や冷戦を反映したものなどがありました。また、ロシア以外の旧ソ連構成国の諸都市やそこに住む多様な民族・文化を描いたマッチラベルも旧ソ連ならではのデザインといえるでしょう。東欧やバルト三国で発行されたマッチラベルは、各国語がキリル文字ではないアルファベットで印字されており、デザインもロシアのものとは一味違うところが見どころでした。

(学芸グループ 佐藤重吾)



展示の風景

解説会

ロビー展解説会

2025.4.26(土) 10:00-11:00

講師：ありよし きなこ氏（造形作家）

宮川 琢^{おさむ}氏（当館研究協力員）

ロビー展で展示された旧ソ連圏のマッチラベルの所有者であり造形作家のありよしきなこ氏と、当館研究協力員でロシア事情に詳しい宮川琢氏を講師に迎え、ロビー展の解説会を開催しました。解説では、一つ一つのラベルに関するありよし氏のエピソードトークに加え、宮川氏によるラベルの日本語訳やそれにまつわる「ロシアあるある」など、非常に盛りだくさんの内容でした。おかげさまで、予定よりも多くの方々に聴講いただきました。

解説会ではまず、ありよし氏が旧ソ連のマッチラベルに興味をもった経緯が語られました。友人からのヨーロッパ土産として旧ソ連のマッチラベルを贈られたありよし氏は、当初そのデザインに関心をもったそうですが、印字されている内容がわかるようになってからますますその奥深さに引き込まれていったそうです。ちなみに、収集したラベルの大部分は2011年から数年の間にインターネット・オークションで落札したものとのことでした。

解説会のなかでありよし氏が何度も言及していたのは、マッチラベルという身の回りにありふれたような日用品でも、それを多数収集し、比較・分類してみることで、ソ連という社会のなかで暮らしていた当時の人々の生活の一端が見えてくるのではないかと、ということでした。このように、具体的な「モノ」を通じて、それが作られ使用された社会や文化について考えるという姿勢は、博物館における研究でも基本となるものであり、学ぶ点が多かったです。

解説会の終盤では、ありよし氏が今後考えてみたいこととして、そのほとんどが時代的に重なっているという「ソ連と昭和」というテーマが紹介されました。このテーマが今後どのような方向に展開していくのか、今からとても楽しみです。

(学芸グループ 佐藤重吾)



解説会の様子

第40回特別展「雪原を駆ける—北方民族・冬の移動手段」

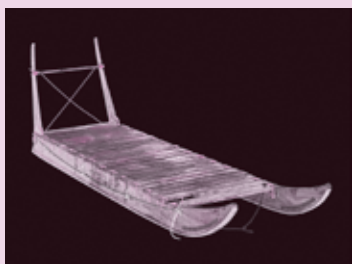
長い冬の間、北方地域の大地には雪が降り積もり、川や湖は凍結します。夏とは異なる雪氷に覆われた環境で効率よく移動するため、北方に暮らす人びとはさまざまな工夫をこらしてきました。本展示では、北方諸民族によって創り出され、洗練されてきた冬季の移動手段について紹介します。

会期：令和7年(2025年)7月19日(土)～10月19日(日)

会期中の休館日：10月6日(月)、14日(火)

会場：北海道立北方民族博物館・特別展示室

観覧料：一般450円、65歳以上300円、高大生200円
(常設展とのセット 一般800円、65歳以上300円、高大生320円)



グリーンランドの犬ぞり (撮影：城野誠治)

関連事業：

講座「グリーンランドのそりを組み立ててみよう」

日時：2025年7月12日(土)10:00～12:00

講師：日下 稔(当館学芸員)

特別展関連講演会「北方地域の犬ぞり文化」

日時：2025年7月19日(土)10:00～11:30

講師：北原モコットウナシ氏(北海道大学アイヌ・先住民
研究センター)・中田 篤(当館主任学芸員)

特別展解説講座

日時：2025年8月16日(土)10:00～11:30

解説：中田 篤(当館主任学芸員)

ロビー展「北に魅せられた人2 画家木村捷司^{しやうじ}」

北方に縁ある人物について紹介する「北に魅せられた人」シリーズの2回目として、画家の木村捷司と彼の作品を紹介します。

会期：令和7年(2025年)5月31日(土)～6月22日(日)

会期中の休館日：6月2日、9日、16日

会場：北海道立北方民族博物館・ロビー

観覧料：無料

共催：木村捷司記念室

INFORMATION

行事報告

講座・研修など

◆4月9日(水)、研究会「Co-Producing Knowledge with Indigenous Communities: Remote and Digital Methodologies」(講師：N. マーモントヴァ氏、バーミンガム大学)を実施しました。研究会終了後、当館収蔵庫のエベンキ関連資料を見学されました。



オンライン併用で実施しました。

◆4月22日(火)～24日(木)、2025年度の北海道立北方民族博物館インターンシップとして、V. パリロワ氏(東北大学大学院環境科学研究科・博士後期課程)を受け入れました。

◆5月24日(土)、研修会「文化財写真研修会」(講師：城野誠治氏、東京文化財研究所専門職員)を開催しました。オンライン、現地参加ともに、全国から文化財写真に関心のある方々が集まりました。



ライティングがとても難しかったです。

はくぶつかんクラブ

◆5月10日(土)、はくぶつかんクラブ「まが玉づくり」(講師：平栗美紅解説員)を開催しました。参加者は石を熱心に磨いて、思い思いのまが玉を作りました。



耐水ペーパーで石を磨きます。



上手にできました！

職員の移動

[退職] 令和7年(2025年)3月31日

宮川 琢^{おさむ}(学芸員)

[採用] 令和7年(2025年)4月1日

小西 智恵(解説員)

日下 稔(学芸員)

佐藤 重吾(学芸員)

倉本 優(学芸員)

北方民族博物館だより No.137

令和7年(2025年)6月20日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<https://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会